

# 南京・平頂山事件 史実と向き合って

## 大阪「加害」語る2集会

戦時中の旧日本軍による加害の歴史を語る二つの集会在、大阪市内であった。

「南京の記憶を今につなぐ」は3日であった。1937年の南京事件について



大勢の人が訪れた集会  
「南京の記憶を今につなぐ」は3日、大阪市

長年調べている松岡環・銘心会南京代表と、ドイツ文学が専門の市川明・大阪大名誉教授が「アウシュビッツから南京へ」と題して討論した。2人は日本の歴史認識について、ナチスのこととは比較的よく知っているのに南京はそうではないと指摘。松岡さんは「人の国はしっかり見るが、我が国のことになったら見られない」と指摘。市川さんは「『ドイツはひどい』という前に、自分たちの加害の歴史を謙虚にふりかえるべきだ」と応じた。

南京民間抗日戦争博物館の呉先斌館長も講演した。南京で生存者への聞き取りを重ねているのは、中国政府の反日教育の影響ではなく、子どもたちから祖父ら大人たちの話を耳にして

心に刻まれているからだ」と説明。「日本に歴史を知ってもらおう責任と義務がある」と来日理由を話した。

その後、生存者にインタビューした松岡さんの最新記録映画「太平門消えた1300人」が上映された。

◇  
旧日本軍による住民虐殺をテーマにした「平頂山事件」を学び平和を考え「無順の奇蹟を受け継

ぐ会関西支部主催」は3、4日に開かれた。中国の生存者が日本政府に損害賠償を求めた訴訟を担った川上詩朗弁護士が「日本が再び『戦前』にならないために」と題して講演した。

川上弁護士や訴訟記録などによると、事件は32年に発生。旧日本軍は、中国東北部にある平頂山集落の住民を1カ所に集めて機関銃の一斉掃射や銃剣で殺害

し、重油による焼却などで事実を隠した。

「同じ過ちを繰り返さないためには事実と向き合わないといけない」と川上弁護士。戦前のような軍隊の暴走を防ぐには立憲主義や人権保障の確立が大切だと説き「戦争は始まると止められない。兆候が出てきていることに声を上げなければいけない」と話した。

(下地毅)